

清洲宿についての一考察

中 野 良 法

1. 清洲宿の概要

昭和61年から行われた五条川河川改修に伴う清洲城下町遺跡の発掘調査において、江戸時代以降の遺構・遺物が確認された。この時期の遺構・遺物が検出された調査地点は61A区、62C区、61B区である（第1図）。これらの地区は江戸時代に清洲宿の町並が形成されたところである。

1610年（慶長15年）から行われた清洲城及び城下町の名古屋移転（いわゆる「清須越」）ののち、その故址に1616年（元和2年）、名古屋と大垣を結ぶ美濃街道の宿駅として、清洲宿が桑名町に設置された。1624年（寛永元年）には本成寺を建立し、久証寺を甚目寺から移転させるなど町としての様相を確立していった。1668年（寛文8年）、火災のため宿駅を神明町に移転した。第1図は天保年間に作られた「清洲宿詳細図」⁽¹⁾及び「清洲町史」を基に作製したものである。当時旅籠は15軒、揚屋・置屋が40軒ほどあった。明治に入り、政治体制が変革するとともに、1871年（明治4年）清洲邑宰所（旧代官所）が廃されるなど清洲宿の政治的な重要性の衰えが窺われる。その後、1886年（明治19年）には東海道線が敷設されると、清洲宿の運輸面の衰退も窺われる。また1891年（明治24年）の濃尾地震により清洲周辺も多大な被害を受け、宿場の衰退に拍車をかけた。



第1図 清洲宿主要施設配置図

2. 遺構が語るもの

清洲町では、現在も宿場の町屋が残されていたり、美濃街道が生活道路として重要な位置にあるなど、清洲宿当時の生活面と現代の生活面がほぼ同レベルに存在すること、また土地事情や開発などによる掘削によって、宿場町の遺構の残存状況はあまり良好とはいえない。この2年間の発掘調査では、井戸・廃棄土坑・溝など比較的深く掘り込まれた遺構しか確認しえなかった(第4図)。したがってここでは溝・井戸・廃棄土坑から発掘調査地区での宿場町の地割を想定してみたい。

61A区では4箇所の地割が想定される。いずれも溝によって区画され、井戸または廃棄土坑が配されている(第2図)。それはSD01によって区画され、SE01を含む地区、SD01・03・07・SK33によって区画され、SK01を含む地区、SD03・07によって区画され、SE11を含む地区、SK33・SD06によって区画され、SK02・SE02・03・04を含む地区である。この調査区の地割は、長方形を示す箇所、正方形を示す箇所が組み合わされた不整区割が想定される。

62C区では大きく3箇所の地割が想定される。それはSE04・13・14によって構成された地区、SE06・10・11によって構成された地区、SE05・08・09によって構成された地区である。これらの井戸群はいずれも3基づつの切り合い関係にあり、段階的に南に移行する傾向を示している(第3図)。SE14及びSE11は、現存する美濃街道からの距離がほぼ等しい。SE13及びSE10、SE04及びSE06の位置関係もほぼ等しい。したがって、62C区では、短冊型の地割が少なくとも3箇所想定される。

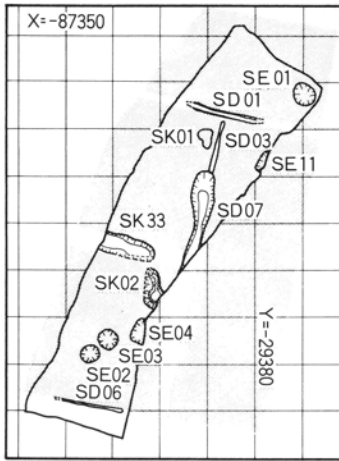
61B区ではSK45のみであるため、この調査区は町屋が展開する区域の外側にあたると思われる。

3. 出土遺物

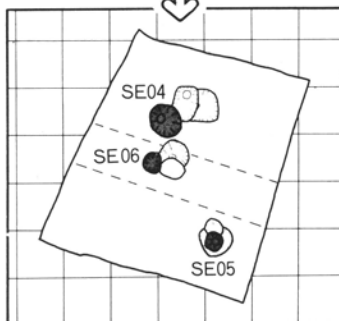
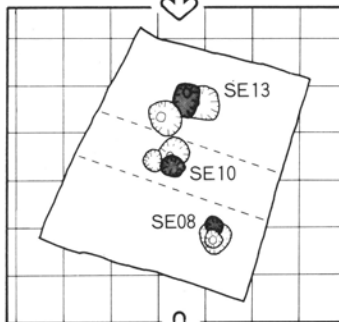
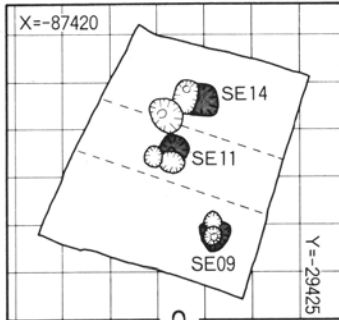
ここでは主な遺構から出土した遺物を紹介する。いずれの遺構も・瀬戸・美濃系の陶磁器が大多数を占める。

61A区SK01からは陶器・磁器ともに椀類(第6図1・2)、皿類(第6図4・5)、瓶類(第6図10・11・12)、灯明具(第6図8・9)、蓋類(第6図6)、蓋物(第6図7)などの日用雑器がほとんどである。いずれも瀬戸・美濃系で、第6図8・12は磁器である。第6図3は産地は不明であるが、文様を全て細い線で描いた、造りの丁寧な磁器である。SK02では陶器の椀類(第6図13・14・15・16)が多くを占める。他には皿類(第6図17・18)、鉢類、灯明具などがあり、この遺構も日用雑器がほとんどである。第6図にあげた遺物はいずれも瀬戸・美濃系の陶器である。

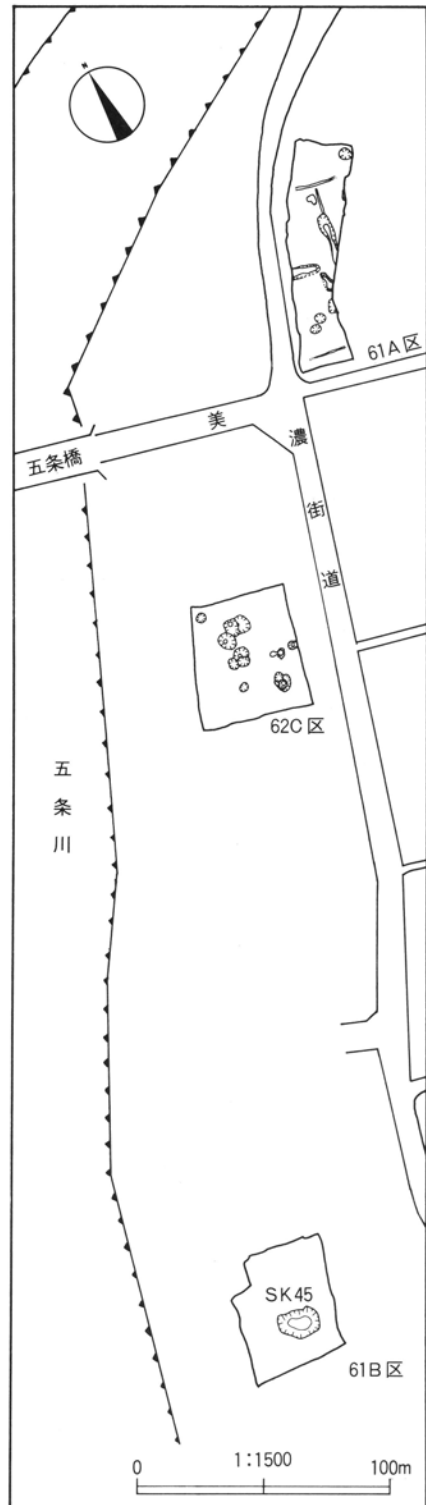
61B区SK45は、61A区SK01・02に比べ遺物がかなり多量に出土した。勸愛知県埋



第2図 61A区地割想定図



第3図 62C区地割想定図

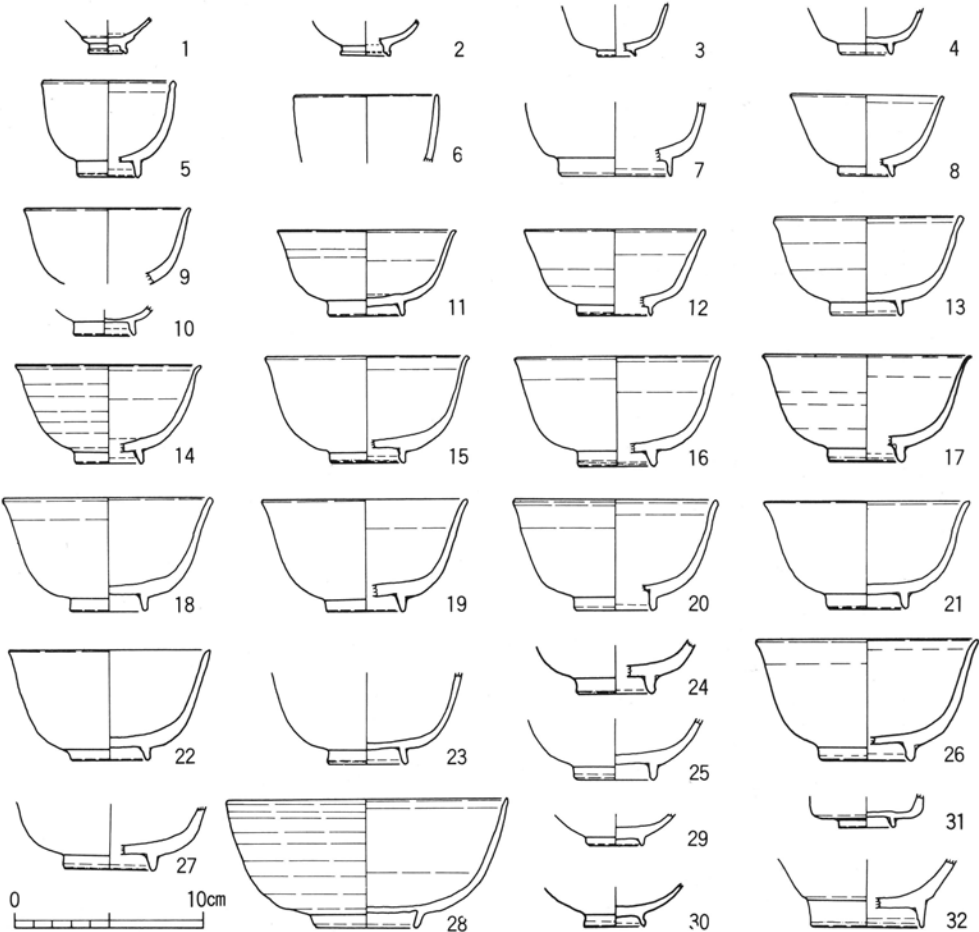
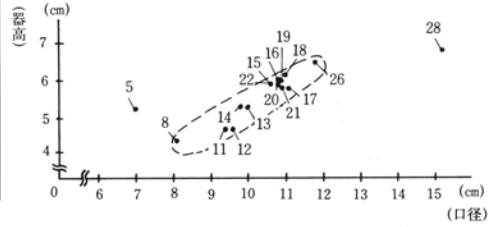


第4図 清洲宿関係遺構配置図

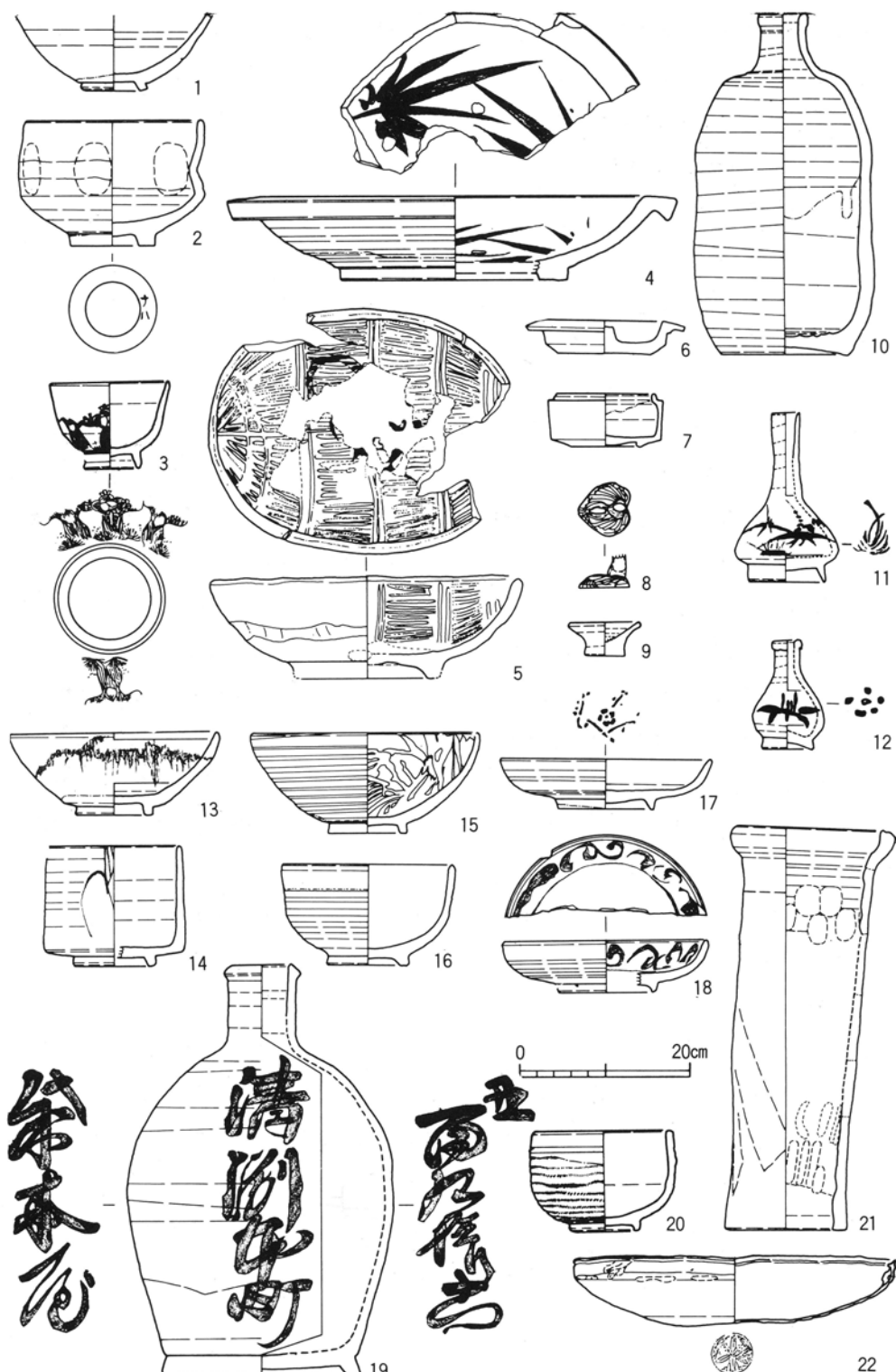
表-1 61A区SK01出土磁器碗(瀬戸・美濃系)計測値

(単位はcm)

遺物番号	口径	底径	器高	文様	備考	遺物番号	口径	底径	器高	文様	備考
第5図-1		2.0			I類	第5図-22	10.6	4.2	5.8	丸文	III類
2		2.6		源氏香に植物文	"	23		4.2		唐草文	"
3		2.1			II類	24		4.3			"
4		2.8		花文	"	25		4.3		雲に縦線文	"
5	7.0	3.4	5.15	宝珠文	"	26	11.8	5.0	6.4	花文	"
6	7.6			鳥文	"	27		4.7		植物文	"
7		6.0		笹文	"	28	15.2	5.8	6.7	花と文字文	IV類
8	8.1	3.0	4.3	花文	III類	29		3.0		植物文	V類
9	8.7			渦文	"	30		3.3		植物文	"
10		3.3			"	31		3.0		源氏香に河骨文	VI類
11	9.4	4.0	4.6	蝶文	"	32		6.0			V類
12	9.6	4.0	4.6	梅花文	"						
13	10.0	3.9	5.2	花に蝶文	"						
14	9.8	3.6	5.2	花文	"						
15	10.6	4.0	5.8	山水と漢詩文	"						
16	10.8	4.1	5.95	芒文	"						
17	11.1	4.0	5.7	菊唐草文	"						
18	11.0	4.0	6.05	植物文	"						
19	10.9	4.2	5.9	菊文	"						
20	10.8	4.4	5.8	笹文	"						
21	10.9	4.3	5.7	丸文	"						



第5図 61A区SK01出土磁器碗(瀬戸・美濃系) (1:4)



第6図 主な遺構の出土遺物(1~20は1:4、21・22は1:8)

蔵文化財センターの「昭和61年度年報」に概要を記してあるため、ここではごく一部を紹介しておく。第6図19にみられるように、比較的法量の大きい瓶類（通称「通い徳利」）には屋号・町名・番号が必ず記されている。第6図19は呉須を使用しているが、他に鉄釉などもみられる。瀬戸・美濃系である。第6図21は、常滑系のいわゆる「アカモノ」と称される非型押しの土管である。第6図22は土師器ナベ（焙烙ナベ）である。

第6図20は、62C区SE04出土の椀（銚茶椀）で、産地は瀬戸・美濃系である。

次に、清洲宿関係のほとんどの遺構から確認された瀬戸・美濃系の磁器について、61A区SK01出土の碗類を例に紹介する。

この碗類は7分類できる。Ⅰ類は器高に対して口径が2～3倍ある、いわゆる「小杯」である（第5図1・2）。Ⅱ類は器高に対して口径が1.4倍あり、胴部がかなり立ち上がるタイプである（第5図3～7）。Ⅲ類は器高に対して口径が1.8～1.9倍あり、口縁部が外反するタイプである（第5図8～27）。Ⅲ類の中でも法量により5類に小区分できる。口径9cm以下の器形（第5図8～10）、口径9.5cm前後の器形（第5図11・12）、口径9.9cm前後の器形（第5図13・14）、口径10.6～11.1cmの器形（第5図15～25）、口径11.8cmの器形（第5図26・27）である。Ⅳ類は口径が15.2cmと大ぶりの椀である（第5図28）。Ⅴ類は底径に対して、腰部から胴部にかけて立ち上がりの緩やかなタイプである（第5図29・30）。Ⅵ類は高台脇と腰部がほぼ同じ高さを測り、胴部は直立するタイプである（第5図31）。Ⅶ類は高台が高く、高台脇から口縁部にかけてはほぼ直行する、いわゆる「広東茶椀」である（第5図32）。

器形からは7類に分類できたが、この分類は必ずしも文様⁽²⁾には反映されていない⁽³⁾（表-1）。

61A区・62C区・61B区で検出された清洲関係の遺構から出土した遺物は、若干18世紀のものが見られるが、そのほとんどは19世紀のもの⁽⁴⁾である。

4. 結語

以上述べてきた遺構の展開と出土遺物から考察を加えるならば、五条橋以东（特に発掘調査区付近）において町屋が展開するのは、19世紀に入ってからのことと考えられる。

ところで、筆者の認識不足のためにまとまりのない考察となったが、本稿が、今後清洲宿についてより詳細な考察を行う第1歩となれば幸いである。

最後に、この小稿をまとめるにあたって御教示をえた愛知県陶磁資料館学芸員仲野泰裕氏、（財）愛知県埋蔵文化財センター職員諸氏に記して厚く謝意を表します。

〔注〕

- (1)わかりやすく書き改めたものが清洲町民センターに所蔵されている。原図は徳川黎明会所蔵。
- (2)文様の名称を記すにあたっては、小川啓司「そば猪口絵柄事典」光芸出版 1987、東北大学埋蔵文化財調査委員会「東北大学埋蔵文化財調査年報1」1985 を参考にした。
- (3)但し、第5図13・15・16・19は口縁部内面に幾何学文を配している。
- (4)ここ数年、各遺跡でかなり時期的なところがおさえられているが、19世紀についてはいまだ不確定なところが多いことを考慮して、ここでは19世紀を小区分していない。